【指導者用手引き】

運命を分ける瞬間（タイム・ゼロ）

～狩猟事故ゼロこそがハンターの誇り～

【制作のねらい】

近年、狩猟や有害鳥獣捕獲での人身事故が多発しており、安全対策の強化が求められています。これらの事故の多くは、基本的なルールを守っていれば防げたものであり、狩猟者一人ひとりが事故防止の基本的な取組を徹底することが何より重要です。

本 DVD は、**見た人に「事故を絶対に起こしてはならない」と強く意識していただくこと**を狙いとして制作しました。実際の事故を再現したドラマにより、事故に至るまでのプロセスや、事故の悲惨さをリアルに描いています。

【本 DVD の活用方法】

主に狩猟免許更新に係る講習時に活用いただくことを想定しています。

その他、狩猟事故の防止や安全対策に関連した講習会等でも適宜ご活用ください。

【本解説書の利用法】

再現ドラマを見た後、どこに問題があったか等を視聴者に問いかけ、話し合うことにより、視聴者の事故防止意識が一層向上されます。本解説書は、その際の手引き書として、本 DVD を解説する立場の方（講習会の講師）向けに作成しています。

（お願い）

再現ドラマの中には様々なルール違反やマナー違反が出てきますが、作品の中で全てを解説しているわけではありません。このため、講師の方は、各章の登場人物のどこに問題があるのかを、事前に十分に把握していただきますようお願いします。

運命を分ける瞬間（タイム・ゼロ）
～狩猟事故ゼロこそがハンターの誇り～

第一章 「狩猟中の事故」 ～矢先の安全不確認～

収録時間（13分）

ストーリー

間宮不二夫（まみや ふじお）は３０年以上の経験を持つベテランハンターです。しかし、彼は猪狩りの最中に事故を起こし、人ひとりの命を奪ってしまいました。被害者の家にお詫びに行った間宮は、被害者の妻に拒絶されます。間宮は２億円の賠償金を請求されていますが、保険でまかなえる金額ではありません。妻にも離婚を切り出されてしまいます。さて、どうしてこのような事故が起こったのでしょうか。

間宮とその仲間たちは巻き狩りをしていました。何度も来ている良く知る猟場です。間宮の仲間が猪を狙い発砲しますが外してしまいます。仕方なく、人里に近い猟場へ移動していたところ、前方のササ藪の中に猪を目視した間宮は、思わず引鉄を引き、猪の後方にいた被害者を死亡させてしまいます。

事故の背景

銃猟では、言うまでもなく「矢先の確認」などの基本的なルールを守ることは不可欠です。この章では、主人公に「焦り」の気持ちがありました。また、仲間に対する見栄や、人がいるはずがないという思い込み、慣れといった要素もありました。そして主人公は、「矢先の確認」が不十分なままで水平に発砲し、悲惨な事故を起こしてしまったのです。

どんなに経験を積んでも、ふとした事で油断が生じてしまいます。たった一発の銃弾が、何の罪もない他人の命を奪い、自分や家族の大切な生活も失い、ひいては、狩猟者に対する世間のマイナスイメージを助長することになります。大切なのは、技術よりも、狩猟者として事故防止の意識を常に持ち続け、基本を徹底することなのです。

事故防止のために

「そもそも矢先の確認が難しい時は発砲しない」

◉尾根を越えるような撃ち方は決してしない。また、藪の茂みの奥や灌木越しなど、見通しの悪いところでは発砲しない。

◉常に、発射可能な方向とそうでない方向を確認しながら歩き、少しでも疑問があった場合は発砲しない。

◉撃ち取る自信のない遠射や軽はずみな発砲はしない。

「水平撃ちには十分な注意を」

◉猟場では水平撃ちになる場合もあるが、常に前方に人がいるかもしれないと意識し、必要以上に遠くまで飛ばないように安土があるか等を必ず確認する。

「絶対に音や気配だけで判断しない」

◉獲物の姿をきちんと確認するまで発砲しない。

◉猟犬がほえたからといって直ぐに撃たず、目視で確認すること。猟犬がほえた方向に撃ったら、獲物はおらず、人にあたってしまったという事例が多数ある。

「巻き狩りでは勝手に持ち場を離れない」

◉巻き狩りなどのグループ猟をするときは、狩猟開始前の事前ミーティングをしっかりと行うとともに、お互いの位置や動きを十分把握しておく。

◉共猟者に無断で持ち場を動いたことで、仲間から誤射された事例が数多くある。特に「立ち（＝射手）」は持ち場についたら、共猟者に無断で動いてはいけない。

講師から視聴者に問いかけたいこと

◉間宮の共猟者が獲物を外した時、別の共猟者がそのことをとがめました。このことについて、どう思いますか？

よくある光景かもしれませんが、このことが大きなプレッシャー・焦りとなって事故に繋がる危険が大きいということを、各自が思い至るように誘導して下さい。

◉間宮が銃を構えて引鉄を引くまでの間、彼の行動のどこに問題があったのでしょうか？
また、彼の頭の中にはどのような考えがあったのでしょうか？

さらに、実際に自分たちの狩猟で似たようなことはなかったか、自分が主人公又は共猟者だったらどうしているか等も考えてもらうようにして下さい。

◉万一、銃猟中に人に危害を加えてしまったら、自分の身の回りでどのようなことが起こるでしょうか？

できるだけ身近な実例（軽傷事例）を取りあげ、加害者が現実にどのような影響を受けたのかを紹介して下さい。ただし、視聴者に狩猟を辞めさせたいわけではないので、どうすれば防げたのかということを重点的に解説して下さい。

運命を分ける瞬間(タイム・ゼロ)
～狩猟事故ゼロこそがハンターの誇り～

第二章 「猟銃の取り扱い」 ～暴発～

収録時間（9分）

ストーリー

白岩雅彦(しらいわまさひこ)は、まだ狩猟の経験も浅い若いハンターです。彼は鹿狩りの最中に、銃の暴発事故で猟の先輩である香川泰平(かがわたいへい)に重症を負わせました。一体なぜ暴発事故が起こったのでしょう？

白岩と香川は、流し猟をしていました。獲物を見つけた二人は車を降り、道なき道を進んでいきます。しかし香川の持つ銃口は、並んで歩く白岩の方を向いています。白岩は注意しますが、香川は言うことをききません。また、香川がこまめに脱包していないことをとがめる白岩ですが、香川は「脱包なんかしてないでもっとチャッチャと動かないと」と開き直ります。白岩の頭に、香川の言うことが正しいのでは？との考えがよぎり、白岩もその場で自身の銃に弾を込めます。

鹿を見つけ車を止めた二人は、素早く銃を取り出し走り出します。しかし、白岩が木の根につまずき転倒。その時銃が暴発し、前を走る香川の頭部に着弾したのです。

事故の背景

脱包せず、転倒等によって暴発する事故が多く発生しています。銃器を取扱う時は、発砲の機会の直前まで装てんしないこと、発砲の機会が遠のいたらこまめに脱包することが大切です。この章では、香川（先輩ハンター）には長年の経験からくる慢心や、白岩（新米ハンター）には先輩が言っているんだからという気の緩みもありました。

今まで大丈夫だったからとか、経験豊富な先輩が脱包していないから自分も、という考えは捨てなければなりません。銃器や実包の取扱いについては、一つひとつの些細な動作を安全に行うことが暴発事故を防ぐ鍵となります。逆に、些細な動作だからと言っておろそかにすることが、事故に繋がる第一歩になっているのです。普段からの心がけや意識の持ち方が、事故を起こすかどうかの分かれ目ともいえます。

※銃口を共猟者の方に向けている場面

※林道上で停車、銃カバーを外している場面

事故防止のために

※以下のいずれについても、複数人で猟をする場合には、お互いに声をかけ合って確認しあうことが有効です。

「とにかくこまめに脱包の確認をする」

◉銃器を手にした時や、銃器から離れる時は装てんの有無を調べ、装てんしてあれば脱包する。

◉発砲の必要性の起こる直前まで装てんしない。必要性が遠のいたらこまめに脱包する。

「銃器の管理・点検・整備」

◉「銃砲刀剣類所持等取締法」を遵守し、適切な取扱いを徹底する。

◉年に一度は銃器の専門技術者の点検を受けて整備する。

◉正常に発射する適正実包を使用する。銃器に適合し、かつ、品質の劣化していない適正な装弾を使用する。

「いかなるときも銃口は人に向けない」

◉実包を装てんした銃器は、銃口を上方、人のいない方向、または射撃方向に向けて保持する。たとえ実包が装てんされていなくても、絶対に人に銃口を向けてはならない。

「１人で猟をする時は特に注意」

◉複数人で行う猟では互いに注意喚起し合えるが、１人だとそうはいかない。実際に、１人のときこそ気が緩み、暴発等の事故が起こる場合が多いため、特に注意が必要。

講師から視聴者に問いかけたいこと

◉２人の行動には、作品中では特に解説されていないルール違反やマナー違反もありました。それはどういった点でしょう？

発砲場面だけでなく、例えば、車の停車位置や銃のカバーを取り外すタイミングなど、一つひとつの動作・場面が適切だったか、話し合ってみてください。

◉このような暴発事故を起こさないために、私たちはどういったことに気をつけていけばいいのでしょうか？

実際に自分たちの狩猟で似たようなことはなかったか、自分だったらどうしているか等、自分たち自身のこととして考えてもらいましょう。

◉１人で狩猟する場合には、どうしても気が緩みがちですが、そういう時にも基本を徹底するためには、どういう対策ができるでしょうか？

講師が狩猟者である場合は、自身が気をつけていることや取り組んでいることを紹介した上で、いろいろなアイデアを出し合ってもらいましょう。

第三章「わなによる事故」 収録時間（10分）

ストーリー

念願だった緑豊かな田舎暮らしの夢をかなえ、中山達夫（なかやまたつお）は幸福な家族生活を送っていました。ある日、近くの裏山で息子の良一（りょういち）が友達とかくれんぼをしていると、突然音がして、良一の足首をくくりわなが締め付けました。幸い軽い怪我ですみましたが、誰がわなを仕掛けたかはわかりません。わな周辺に標識が見当たらなかったのです。

不安を感じた達夫は、地元狩猟者のまとめ役をしている山岸（やまぎし）と会うことにしました。山岸は、猟を始めた経緯や、周辺住民とのコミュニケーション不足を感じていることなどを伝え、「一部の不心得者のせいで、私たちも胸を痛めていることは、ご理解いただきたい」と誠実に語ります。

ほどなくして達夫夫妻のもとに、犯人逮捕の知らせが入ります。しかし犯人は、標識は付けていたと言い張っています。山岸の誠実さに感銘を受けた達夫でしたが、同時に基本的なルールを守れない狩猟者に強い憤りを感じ続けることになります。

事故の背景

ドラマの中では、わなの標識が見当たらず、そもそも子どもが遊びに入るような場所にわなを仕掛けたことも事故の一因になっています。

ドラマの中で、わなを仕掛けた人物は標識を付けていたと言っており、もしかすると、ルール通り付けていた標識が何かの拍子に外れて、目につく場所には見当たらなかったのかもしれません。しかし、仮にそうだったとしても、事故に結びついてしまった場合には、告知など事故対策が十分になされていたか、標識の設置方法に問題がなかったか、見回りは適切に行われていたか、わなを仕掛けた場所が不適切でなかったか等が検討されなければなりません。

銃とは異なり、わな猟は、他者を死亡させるといった事故は少ないです。しかし、近年ではわな猟免許者が全国で大きく増加しており、わな猟による事故やトラブルがこれまで以上に増加することが懸念されています。わな猟を行う狩猟者一人ひとりが、改めて基本的なルールとマナーを守ることを徹底しなければなりません。

事故防止のために

「適切な標識の設置」

◉わなの標識は、見やすい場所につけなければならない。必要に応じて、わなをかけていることを知らせる注意看板を立てるなどの配慮も重要。

「適切な数・設置場所の設定」

◉わなの設置は、自分で管理できる地理的範囲内で、かつ管理できる数以下とする。同時に３１個以上のわなを仕掛けることは禁止。

◉人の往来がある場所や、鳥類及び非狩猟鳥獣が間違ってかかるおそれのある場所には、わなを仕掛けるべきではない。

「わなの管理の徹底」

◉事故防止等のため、頻繁に見回りを行う。

◉猟期の終了日までに、わなは撤去・回収する。

「止めさし時の注意」

◉わなにかかった獲物からの逆襲による死亡・重傷事故が多いため、止めさしの際が最も危険であると認識する。

◉くくりわなのワイヤーがちぎれて襲われた例や、獲物が動かないからと油断して近づいた際に逆襲された例などもあるため、絶対に安易に近寄らない（見回り時も同様）。

「関係者とのコミュニケーションが重要」

◉事故やトラブルを避けるため、猟場の土地占有者や周辺住民と普段からコミュニケーションをとる。

◉垣等で囲まれた土地や作物のある土地での狩猟は、予め必ず土地占有者の承諾を得る。

講師から視聴者に問いかけたいこと

◉山岸（地元猟友会長）が中山に話したことについて、どのように感じましたか？

自分の猟場の周辺住民とコミュニケーションはとっているか、また、もし自分だったら、中山に対してどのように説明するか考えてもらいましょう。

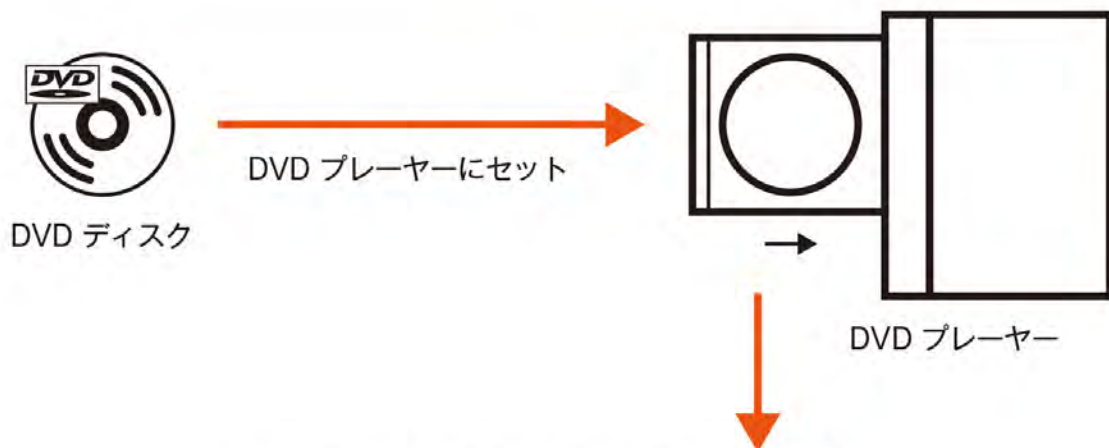
◉事故防止の観点から、わなを仕掛ける時は、どのようなことに気をつけなければならないでしょうか？

事故防止の観点以外にも、土地占有者の了解や、猟犬や他の鳥獣の錯誤捕獲のおそれなどにも配慮が必要であることを解説してください。

◉狩猟者が地域を守る存在として地域社会から認められるためには、普段からどのようなことを心がけていけばいいでしょうか？

講師が狩猟者である場合は、自身が気をつけていることや取り組んでいることを紹介した上で、いろいろなアイデアを出し合ってもらいましょう。

※人の往来がある区域でのわな設置は控えるべきですが、設置する場合は注意看板などで十分に周知することが重要です。

DVD操作フロー

TV画面にトップメニューが自動で表示されます。

【トップメニュー】

●DVDビデオは、映像と音声を高密度に記録したディスクです。DVDビデオ対応プレーヤーで再生してください。詳しい再生上の取扱方法については、ご使用になるプレーヤーなどの取扱説明書をご覧ください。

COLOR	STEREO	MPEG2	片面・一層	複製可能	16:9	2 NTSC 日本国内向	DVD VIDEO

非売品

企画

環境省

制作

東映株式会社

制作年月（平成26年12月）